

第2章

バンバラ語の声調¹ —語の声調パターンと自律分節の声調付与—

小森淳子

1. はじめに

バンバラ語はニジェール・コンゴ語族、マンデ語派に属し、マリ共和国で広く話されている言語である。首都バマコから東部のセグ、モプティにかけて母語話者が 400 万人以上おり、第二言語使用者は 1 千万人以上とみられる (Simons & Fenning (eds.) 2017)。セネガルのマンディンカ語 (マリンケ語) やギニアのマニカ語、シエラレオネ、リベリアのマンディングゴ語、コートジボワールのジュラ語などは非常に近い方言関係にある。

バンバラ語は正書法が確立されており、教科書や雑誌、書籍なども発行されているが、一般の出版物では声調表記がないのが普通である。バンバラ語の声調は、高・低の二つが認められており、おおむね語単位でパターンが決まっているが、複合語を作る時には複合語の声調パターンに従う。また浮遊声調やダウンステップなどが見られ、自律分節的な声調分析が適している。本稿ではバンバラ語の声調について、語単位でのあらわれ方、複合語や名詞句、文中での表れ方などを概観し、そこにみられる規則や表記の問題について考察する。

¹ 本稿は小森 (2017) で扱ったデータや先行研究の事例をもとに、新たな分析と考察を加えて発展させたものである。小森 (2017) では「アクセント」と呼んでいたが、それはバンバラ語に、ある程度のアクセントの型があると考えたためである。しかし、バンバラ語の記述では一般に「トーン」と呼ばれており、自律分節的な「トーン」の分析が必要であると考えられている。本稿では「アクセント」と「トーン」の定義の違いについて踏み込んだ議論はできないため、音の高低とそれに関する現象をここでは「声調」と呼ぶことにした。なお、本稿の執筆にあたり、査読者の方々から有益な指摘を多くいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

2. バンバラ語の声調パターン

バンバラ語の声調は音節が担い、高 (H)、低 (L) のほか、上昇 (\widehat{LH})、下降 (\widehat{HL}) などが見られる。基本的な語は1、2音節のものが多く、3音節以上の場合には基本語に加えて、語源的に複合しているものや接辞がついたものが多くなる。語の声調パターンには偏りが見られ、すべての音節が H である H 型と、語の前半部が L で後半部が H である LH 型の2つのパターンが多い。以下に、語 (単純語) と複合語の声調のパターンを見ていく²。

2.1 語の声調パターン

1音節の語は、名詞以外の語の声調は H か L であるが、名詞の場合は H か \widehat{LH} の声調になる。

(1) 1音節の語 (名詞以外の語)

H	fó	「言う」	dó	「知る」
	ń	(1人称単数代名詞)	ká	(所有詞)
L	fò	「挨拶する」	dò	「踊る」
	à	(3人称単数代名詞)	wà	(疑問標識)

(2) 1音節の語 (名詞)

H	só	「家」	bá	「川、母」
	jí	「水」	dé	「子供」
	dó	「日」		
\widehat{LH}	sò	「馬」	bǎ	「ヤギ」
	cě	「男」	sǎ	「年」
	kǔ	「頭」		

² バンバラ語には正書法があるが、本稿の表記は基本的に IPA に従う。母音は i, e, ɛ, a, ɔ, o, u の7つがあり、それぞれの短母音に対して長母音と鼻母音がある。子音には、b, c, d, f, g, h, j, k, l, m, n, ɲ, p, r, s, t, w, z の20の子音が認められる。

音節構造は V, CV, N, nCV, CwV, CjV の6通りが認められる。声調は音節が担い、母音 (V) か成節鼻音 (N) の上に、H (´), L (˘), HL (ˆ), LH (ˆ) などと表記する。

名詞は単独で発音される場合、普通は「限定形」であられる。限定形は名詞(句)の後に限定詞がついた形であり、限定詞はLの浮遊声調である。それゆえ(2)の名詞は、実際に発音される時には、Hの名詞はHLの下降調(たとえば sô [sô]「家」となる。そして LHの名詞は、最後が下降調になる(たとえば「馬」は最後にLが加わり、soの1音節が上昇と下降のLHLの声調で発音される)(Rialland & Badjilé 1989: 4, Dumestre 2003: 25)。1音節の語は基本的にはHかLの声調をもつと言えるが、名詞ではLの語にはHが加わってLHの声調になっているということである。この点については4節で詳しくみる。

Dumestre (2003) は、バンバラ語の声調は音節数に限らず、H型(すべての音節がH)とLH型(語の前半部がLで後半部がH)に分けることができ、語全体の90%以上はこれらの型に属しており、それ以外はマイナーな型であるとしている。確かに、2音節の語ではHHとLHのパターンが多い。

(3) 2音節語の主要な声調パターン³

HH	wárí	「お金」	jírí	「木」
	kónó	「お腹」	fúrá	「葉」
	ná:ní	「4」	dú:rú	「5」
	mírí	「考える」	fúru	「結婚する」
LH	mùsò	「女」	finí	「服」
	mògò	「人」	mìsí	「牛」
	kàsí	「泣く」	fàgá	「殺す」
	jòlí	「いくら？」	filá	「2」
	mùgá	「20」	kémé	「100」

³ ここでも、名詞は単独で発音される場合、語尾に限定詞のLがつき、[wárí]「お金」や[mùsò]「女」のように、実際には語末が下降調(HL)で発音される。

2 音節語の場合、可能性としては他に HL、LL の声調パターンがあり得るが、HL のみわずかに見られ⁴、LL は見られない（ただし、文中で LH の語が LL になることはあるが、これについては3節で見る）。

3 音節の語においても、H 型と LH 型が多い。3 音節の場合の LH 型とは、LLH と LHH のパターンである。

(4) 3 音節語の主要な声調パターン

HHH	súrukú	「ハイエナ」
	mínjǎ	「ニシキヘビ」
	súkáró	「砂糖」
LLH	nàmàsá	「バナナ」
	fütèní	「暑さ、熱」
	sùnògó	「眠り、眠る」
LHH	jàkúmá	「ねこ」
	mìsírí	「モスク」
	sàbàrá	「靴」

Courtenay (1974) はバンバラ語の語彙のおよそ 85% が H 型か LH 型であると述べているが、それ以外のパターンも無視できるものではないとして、その他のパターンも列挙している。3 音節の場合、他に (5) のようなパターンがあるが例は多くない。3 音節で可能性のある HLL、LLL の声調は見られない。

(5) 3 音節語のその他の声調パターン

HLH	tásàlé	「やかん」
	bámàná	「バンバラ」

⁴ わずかにみられる HL パターンの語例には、sáhà「こんにちは」（「ようこそ」に対する返答）や wálà「あるいは」、sísà「今」、kúnù「昨日」などがあるが、これらは外来語起源の可能性もある（前2つの語はアラビア語起源の可能性があると仲尾周一郎氏から指摘をいただいた）。挨拶表現には LH̄L のパターンも見られる（mbâ（男性が用いる返答の挨拶）、nsê（女性が用いる返答の挨拶））。これらは例外的な声調パターンとみることができると辞書には個別に声調を記しておく必要があるだろう。

	mǎgòró	「マンゴー」 ⁵
LHL	dàwúdá	「ダウダ」(人名)
	àmí:nà	「アーメン」
HHL	kéjítà	「ケイタ」(人名)

複合語でない4音節以上の語は、語例自体が少ない。また、形態的に重複しているものや外来語起源と考えられるもの、オノマトペ起源と考えられるものが多くなって来る。声調パターンは、やはり H 型か LH 型が主になる。4音節語では、その他のパターンもみられるが、5音節語では H 型か LH 型のみみられる。

(6) 4音節語の主要な声調パターン

HHHH	kélékélé	「唐辛子」
	ménéméné	「アリ」
	kúlúkútú	「輪、円」
LLLL	jàhànàamá	「地獄」
	àlimètí	「マッチ」
	kòlòkòlò	「転がる」
	bèlèbélé	「大きい」
	dògòtóró	「医者」

(7) 4音節語のその他の声調パターン⁶

HHLH	fógófògó	「肺」
HLHL	kúnàsínì	「おととい」
LHLH	làgàsàrá	「夕刻の祈り」
LLHL	màlísájò	「マリサジョ」(人名)

(8) 5音節語の主要な声調パターン

HHHHH	gófèránámá	「政府」
LLLHHH	mìlikimáláká	「ジグザグ」

⁵ Dumestre (2003) では mǎgòró 「マンゴー」と最初の母音が上昇調になっている。

⁶ (7), (8) の語例は Courtenay (1974) による。

kòlòbòkálábá 「ぞんざいな」
 LLHHH kègèkókójó 「おたふく風邪」

バンバラ語の語の声調表記は、慣例では語頭の音節に H か L のみを表記するものが主流である。主要な声調パターンが H 型か LH 型である点から考えられた表記であるが、その他の声調パターンも少数の例ながら、それぞれに声調を示す必要があるだろう。特に、3 音節以上の語の LH 型については、LLH と LHH の違いがあるように、それらを区別して示す必要がある。また少数ではあるが、3 音節以上の語のさまざまな声調パターンについても、それぞれに声調を示す必要があるだろう。声調の表記については、5 節であらためて考察する。

2.2 複合名詞の声調

バンバラ語の声調の主要なパターンが H 型と LH 型であるのは、複合名詞の声調にも見ることができる。複合名詞が作られる場合、全体の声調は H 型か LH 型になる。前の名詞が H で始まる語であれば、(9) のように、他の語や音節に L があっても、複合名詞全体が H 型になる。

(9) dé	「子ども」	+	ké	「男の」	→	déké	「息子」
básá	「トカゲ」	+	kóló	「骨」	→	básákóló	「トカゲの骨」
dé	「子ども」	+	mùsó	「女」	→	démùsó	「娘」
só	「家」	+	mògó	「人」	→	sómógó	「家族」
nú	「鼻」	+	wò	「穴」	→	núwó	「鼻孔」
bámáná	「バンバラ」	+	dùgú	「村」	→	bámánádùgú	「バンバラの村」

前の名詞が L で始まる語であれば、(10) のように、全体が LH 型になる。この場合の LH 型とは前の名詞がすべて L、後ろの名詞がすべて H というパターンである。

- (10) wùlú 「犬」 + ké 「男の」 → wùlúké 「オス犬」
 wùlú 「犬」 + mùsò 「女」 → wùlùmúsó 「メス犬」
 dùgú 「村」 + tígí 「所有者」 → dùgùtígí 「村長」
 nègé 「鉄」 + sò 「馬」 → nègèsó 「自転車」
 dògòtóró 「医者」 + só 「家」 → dògòtòràsò 「病院」

名詞＋形容詞の場合も、声調パターンは複合名詞の場合と同じになる。(11) が H 型、(12) が LH 型のパターンである。

- (11) jírí 「木」 + jémá 「白い」 → jírí jémá 「白い木」
 móbílí 「車」 + bèlèbélé 「大きい」 → móbílí bélèbélé 「大きい車」
 (12) sò 「馬」 + jémá 「白い」 → sò jémá 「白い馬」
 nègèsó 「自転車」 + jùmá 「新しい」 → nègèsò jùmá 「新しい自転車」

上の例の「形容詞」は形容詞的な意味を表しているが、正確に言うと形式的には名詞である(小森 2014 参照)。それゆえ、これらの例も複合名詞の声調パターンをとると言える。複合名詞のこのような声調パターンは、声調の「集約」として知られている(Dumestre 2003: 24, 97; Creissels & Grégoire 1993: 109)。バンバラ語の名詞の声調が H 型と LH 型が基本であり、複合名詞もそのパターンに「集約」されると言える。一方、名詞と数詞からなる名詞句や、文の中にあらわれる語では、以下に見るように、別の声調の変化がみられる。

3. 名詞句や文の中にみられる声調の変化

2 節でみた複合名詞の声調は、結合度が高いゆえに、H 型か LH 型に「集約」されると考えられる。一方、名詞と数詞からなる名詞句や、文中に並ぶ語のように結合度が低い場合は、異なる声調パターンになる。

まず、名詞と数詞からなる名詞句の声調パターンをみてみよう。数詞は名詞のうしろにくるが、数詞が H 型の場合は複合名詞の声調パターンと同じになる。つまり、前の名詞が H 型であれば全体が H 型に、LH 型であれば全体が LH 型に

なる。(13) に H 型の数詞 *kélén* 「1」と *ná:ní* 「4」を例にあげる。

- (13) *só* 「家」 + *kélé* 「1」 → *só kélé* 「1 軒の家」
lákéré 「チョコレート」 + *ná:ní* 「4」 → *lákéré ná:ní* 「4 本のチョコレート」
mùsò 「女」 + *kélé* 「1」 → *mùsò kélé* 「1 人の女」
sigilá 「いす」 + *ná:ní* 「4」 → *sigilá ná:ní* 「4 脚のいす」

一方、数詞が LH 型の場合は複合名詞の声調パターンと異なる。数詞が LH 型の場合、前の名詞の声調は変わらず、数詞が LL になる。LH 型の数詞 *filá* 「2」と *sàbá* 「3」を例にあげる。

- (14) *só* 「家」 + *filá* 「2」 → *só filá* 「2 軒の家」
lákéré 「チョコレート」 + *sàbá* 「3」 → *lákéré sàbá* 「3 本のチョコレート」
mùsò 「女」 + *filá* 「2」 → *mùsò filá* 「2 人の女」
sigilá 「いす」 + *sàbá* 「3」 → *sigilá sàbá* 「3 脚のいす」

(13) では前にくる名詞の声調の LH が LL に、(14) では後ろにくる数詞の声調の LH が LL になっている。いずれも声調の変化がみられるのは LH の語である。

LH から LL への変化は文中においてもみられる。動詞 *kùnù* 「飲み込む」は、単独で現れる時は LH 型であるが、下の (15) のように、文末や文末小辞 *dé* (H 声調) などの前では LL になる。

- (15) a. *ń jé à kùnù⁷*
 1s PERF 3s 飲み込む
 「私はそれを飲み込んだ」

⁷ バンバラ語の基本語順は「主語 補助詞 目的語 動詞」(SXOV) である。

b. *n̩ jé à kùnù dé*
 1s PERF 3s 飲み込む SFP

「私はそれを飲み込んだんだ！」 (Courtenay 1974: 308)

ただし、(16) のように、うしろに L の語がくる場合は、LH のままである。

(16) *n̩ jé à kùnù wà*
 1s PERF 3s 飲み込む QST

「私はそれを飲み込んだのか？」 (Courtenay 1974: 308)

下の (17) は、LH 型の名詞 *fàlí* 「ロバ」と、同じく LH 型の動詞 *sòró* 「見つける」が、それぞれ文中で LL になっている例である。

(17) a. *à má fàlí jé*
 3s NEG.PERF ロバ 見る

「彼(女)はロバを見なかった」

b. *à má fàlí sòró*
 3s NEG.PERF ロバ 見つける

「彼(女)はロバを見つげなかった」 (Creissels & Grégoire 1993: 115)

LH の *fàlí* 「ロバ」は、(17a) のように H の前では LL になるが、(17b) のように L の前では LH のままである。また、(17b) にみられるように、動詞 *sòró* 「見つける」は文末で LL になっている。

以上の例をみると、LH の語が LL になるのは、句末あるいは文末にくる場合と、後ろに H がある場合である。逆にみれば、後ろに L がある場合は LL にならず、語の境界を越えて L が続くような声調の連続が避けられており、一種の異化現象がみられると言えよう。

少ない例ながら、語の境界を越えて LH の連続が LL になる場合がある。それは L の 1 音節からなる主語の後ろに、補助詞やコピュラがくる場合で、補助

詞やコピュラが L になる現象である。ここでも、後ろに L がある場合は、L にならずに H になる (Courtenay 1974: 309, Bird et al. 1977: 11)。下の (18) は補助詞 *be* (現在) の例である。(18a) では H であるが、(18b) では L になっている。

- (18) a. à bé kàsi lá
 3s PRES 泣く PP
 「彼(女)は泣いている」
- b. à bè jélé lá
 3s PRES 笑う PP
 「彼(女)は笑っている」

下の (19) はコピュラ *je* の例である。バンバラ語のコピュラ文は補語の名詞を 2 つのコピュラで挟むが、声調に変化がみられるのは前の方の *je* である。

- (19) a. nǐ jé sò jé
 これ COP 馬 COP
 「これは馬だ」
- b. nǐ jè só jé
 これ COP 家 COP
 「これは家だ」

このように語境界を越えて LH が LL になるのは、L の主語と、補助詞やコピュラが連続した場合にのみ見られる現象であり、動詞などでは見られない。下の (20) の動詞 *bó* 「来る」は前が L の主語、後ろが H の接辞であるが、L にはならない。

- (20) à bó-rá ségú
 3s 来る-PERF セグ
 「彼(女)はセグから来た」

以上、名詞と数詞からなる名詞句と文中での語の声調の変化をみた。ここでの特徴は LH が LL に変化することであるが、これは L の拡張 (spreading) という考えを仮定すると説明できると考えられる。以下にその点について詳しくみていく。

4. L の拡張 (spreading) と H の指定について

LH が LL になるような変化は、自律分節的 (autosegmental) な声調の付与という考えに基づいて、L が語中の右の音節に拡張すると考えるとわかりやすい。Creissels & Grégoire (1993) は、バンバラ語では L が有標で語彙的に指定されており、その L が語中の右隣の音節に拡張するとしている。Rialland & Badjime (1989) でも、LH の語には L だけが指定されており、それが左の音節から順番に付与されるという考えを示している。

Creissels & Grégoire (1993) は基底では H は指定されておらず、最終的に L が付与されなかった音節に、H がデフォルトとして付与されるとしている (Creissels & Grégoire 1993: 110, 116)。そして、L が拡張するのは続く語に L がない場合であり、L がある語が続くと L の拡張が阻止されるという。Creissels & Grégoire (1993) の説を、名詞と数詞からなる名詞句の例で説明すると、以下のようになる (語に指定されている L は、語の境界を越えては拡張しない)。

(21) mùso 「女」 kelē 「1」 (語のレベルでは L だけが指定されている)

↓

mùsò kelē (後ろの語に L がないので、L が拡張する)

↓

mùsò kélé (デフォルトで H が付与される)

(22) mùso 「女」 filà 「2」 (両方の語に L が指定されている)

↓

mùso filà (前の語の L の拡張は阻止され、後ろの語の L だけが拡張する)

↓

mùsó filà (デフォルトで H が付与される)

L の拡張は基本的には語の中でみられるが、(18)、(19) で見たように補助詞やコピュラの場合にも、語の境界を越えて L が拡張すると考えられる。

H がデフォルトとして付与されるという考えは、(21)、(22) のような例ではうまく説明がつくが、すべての H がデフォルトで付与されるということではできない。(4) でみたような3音節語の LLH と LHH を区別するためには、基底で H を指定する必要がある。また、1音節の名詞が限定詞を伴って発音される場合に、sò 「家」や bá 「川、母」のように \widehat{HL} の下降調で発音されるには、もともと語に H が指定されていなければ、限定詞の L が結び付いて、*sò 「家」や *bà 「川、母」のような誤った声調になってしまうだろう。

基底で語に指定されている H と、(22) の mùsò のように、基底とは異なるレベルで付与される H があると考えられるが、あとから付与される H が、デフォルトの H であるかどうかという点について、検討すべき別の現象がある。Rialland & Badjímé (1989) は、下の (23)~(26) のような断定を表す叙述文において、名詞が限定詞を伴う場合と伴わない場合に、声調が異なることを指摘している。バンバラ語では「～だ」という叙述は、断定のコピュラ dǒ を名詞の後ろにおいて表す。下の例はそれぞれ、a が限定詞を伴わない名詞、b が限定詞を伴う名詞の例である。断定の dǒ の声調が下降調の \widehat{HL} であるか、単なる L であるかという違いがみられる。(23)、(24) は H 型の名詞 bá 「川」と bálá 「バラフォン」、(25)、(26) は LH 型の名詞 bǎ 「ヤギ」と mùsò 「女」の例である (Rialland & Badjímé 1989: 6)。

- (23) a. bá dǒ 「川だ」
 b. bá dǒ 「その川だ」
- (24) a. bálá dǒ 「バラフォンだ」
 b. bálá dǒ 「そのバラフォンだ」
- (25) a. bǎ dǒ 「ヤギだ」
 b. bǎ dǒ 「そのヤギだ」
- (26) a. mùsò dǒ 「女だ」
 b. mùsò dǒ 「その女だ」

Rialland & Badjime (1989) はこの現象を説明するために、語には基底の声調に加えて、右端に H が付随していると仮定している。これは「リエゾンの H」 (ton haut de liaison) と呼ばれ、語の境界を示すためにどの語も持っているものであるが、必ずしもその語に結びつくわけではなく、右隣の別の語に結び付けられることもあるとしている。リエゾンの H は限定詞があれば限定詞の前に結び付き、限定詞がなければ、右隣の語に結び付けられるとしている。また、限定詞の L は語末でなければ浮遊した状態で残るとし、以下のような声調の付与を想定している (リエゾンの H は H で、限定詞は \textcircled{L} で示す)。

- (23') a. bá d^ò 「川だ」
 | /
 H H L
- b. bá d^ò 「その川だ」
 \ |
 H H \textcircled{L} L
- (24') a. bálá d^ò 「バラフォンだ」
 ✓ /
 H H L
- b. bálá d^ò 「そのバラフォンだ」
 ✓ | |
 H H \textcircled{L} L
- (25') a. bà d^ò 「ヤギだ」
 | /
 L H L
- b. bà d^ò 「そのヤギだ」
 \ |
 L H \textcircled{L} L

- (26') a. mùsò d^ò 「女だ」
 ✓ / |
 L H L
- b. mùsó d^ò 「その女だ」
 | | |
 L H ⊕ L (Rialland & Badjímé 1989: 8-9)

名詞が限定詞を伴わない場合、それぞれ a の例のように、リエゾンの H は後ろの d^ò に結び付いて d^ò という下降調 (HL) 声調を作る。限定詞を伴う場合は、それが阻止されてリエゾンの H は名詞に結び付き、それぞれ b のように、名詞が HH、LH という声調になる (1 音節語の HH は H で実現する)。

限定詞の L は、語末でなければ、どこにも結び付かず浮遊すると想定されるが、それは、限定詞の後ろに H がくる場合、その H が少し低くなることから、浮遊する L がダウンステップを引き起こすと考えられるからである。下の (27)、(28) のように、否定の断定を表すコピュラ té が限定詞を伴う名詞の後ろにくると、té の H は少し低くなる。

- (27) bálá 'té 「そのバラフォンではない」 (!: downstep)
 | / |
 HH ⊕ H
- (28) mùsó 'té 「その女ではない」
 | | |
 L H ⊕ H (Rialland & Badjímé 1989: 6)

それぞれ前の名詞の語末は H のままで、下降調 (HL) ではなく、また té も上昇調 (LH) ではないので、限定詞の L はどちらにも結び付いておらず、浮遊していて、うしろの H を低くしていると考えられる。名詞が単独で発音される時は、限定詞 L が語末に結び付くため、語末がリエゾンの H+限定詞 L で HL という下降調になると考えられる。

5. 考察

バンバラ語の語の声調は、これまで言われてきたように、多くの語が、すべての音節が H である H 型か、前半部が L で後半部が H である LH 型に分けられるように見えるが、実際には、少数ながら多様な声調パターンがあり、それらは個別に声調を指定しておく必要がある。

1 音節の語には、H か L が指定されていると考えられる。2 音節の語にも H か L が指定されているが、その他の少数の声調パターンも基底で指定しておく必要があるだろう。3 音節の語についても、(4) の 3 つのパターンでは、H が指定されているもの (HHH)、L が指定されているもの (LLH)、そして、LH が指定されているもの (LHH) の 3 つのパターンを基底で指定しておく必要がある。また、(5) のようなパターン (HLH, LHL, HHL) は個別に指定しておく必要があるだろう。

Clussels & Grégoire (1993) は、基底では H は指定されていないとしていたが、3 音節語の LLH と LHH のパターンの違いを説明するには、少なくとも LHH の語には LH を指定する必要がある、すべての H をデフォルトで説明できるわけではないだろう。

また、語境界に「リエゾンの H」が浮遊してあるという考えは有効であると考えられる。リエゾンの H というのは、語がもつと仮定される浮遊声調で、語が単独で発音される時には、最後の音節に結びつくと考えられる。限定詞がある場合は、限定詞の前に結び付けられる。文などで、後ろに別の語が続く場合、限定詞がなければ後ろの語に結び付き、文末ではどこにも結び付かないと考えられる。

リエゾンの H を仮定すると、(2) でみた 1 音節の \widehat{LH} の語(たとえば sò 「馬」)や (3) でみた 2 音節の LH の語(たとえば mùsò 「女」)は、基底では L だけが指定されており、語が単独であらわれる場合に、最後の音節にリエゾンの H が結び付き、さらに後ろに限定詞の L が結び付いていると言える。3 音節の語の場合は、LLH の語(たとえば nàmásá 「バナナ」)は L が指定されていて、1、2 音節目に L が付与され、単独で発音される場合は 3 音節目にリエゾンの H が結び付くと考えられる。また、LHH の語(たとえば jàkúmá 「ねこ」)は LH が基底で指定されており、単独で発音される場合は、3 音節目にリエゾンの H が結

び付く（いずれも、その後ろにさらに限定詞の L が付く）。

3 節では、名詞と数詞からなる名詞句や、文中にあらわれる LH、LLH の語の声調が、LL、LLL に変化する状況をみた。具体的には、当該の語の後ろに L がない場合（つまり H があるか、何もないかの場合）に、LL、LLL の声調になるが、これは、語に指定されている L が右隣の音節に拡張するためだと考えるのが有効である。逆に、その語の後ろに L がある場合は、拡張が阻止されて H が付与される。このことから、LH や LLH の語の H は基底では指定されていないと考えられ、L が付与されなかった場合に、H が付与されると言える。

この付与される H が、デフォルトの H であるのか、語境界に浮遊するリエゾンの H であるのかという問題であるが、リエゾンの H を仮定するならば、これもリエゾンの H であるとする方が経済的であろう。ただし、リエゾンの H とすると、その付与の条件について考慮しなければならないことが増える。それは、(14) で挙げた例と (26a) の例を比べてみると、リエゾンの H の付与の仕方条件をつけなければならないからである。以下に例を再掲する。

(29) mùsófìlà (< mùsò 「女」 + filá 「2」) 「2人の女」 (= (14) の一例)

(30) mùsòdô 「女だ」 (= (26a))

(29) では、mùso 「女」と fila 「2」に、それぞれ初頭の音節に基底で L が指定されており、mùso の L は拡張せず（後ろに L が続くため）、fila の L は拡張して、mùsòfilà となっている。mùsò の2音節目が H になるのが、デフォルトの H が付与されたのではなく、リエゾンの H が付与されたとすると、リエゾンの H は、このような名詞句においては、後ろの語ではなく、前の語の末尾に結び付けられるとしなければならない。

一方、(30) では、mùso 「女」と dô 「～だ（断定詞）」に、基底で L が指定されており、mùso の初頭の L が拡張して mùsò となり、リエゾンの H が dô と結びついて dô となっている。このような文においては、前の語ではなく、後ろの語にリエゾンの H が結び付くとしなければならない。リエゾンの H の存在を仮定すると、その付与について、少なくとも (29) のような名詞句においては

前の語に、(30) のような文では後ろの語に結び付くというような条件が必要となる。

また、(18) や (19) でみたような補助詞 *be* (現在) やコンピュータの *je* (前の方) のような語には、基底で声調が指定されていないと考えられ、前の語の *L* が拡張する例をみた。*L* が拡張するのは、後ろに *H* が続く場合で、後ろに *L* が続くと、拡張は阻止され、最終的に *H* となった。この *H* がデフォルトの *H* でなく、リエゾンの *H* とすると、やはりリエゾンの *H* が後ろの音節ではなく、この音節に付与されるという条件が必要である。

逆に言えば、リエゾンの *H* が後ろの音節に付与されるのは (30) のような断定を表す文の場合であるが、これ以外の例を挙げるができないので、ここではリエゾンの *H* の付与の条件はアドホック的なものにならざるを得ない。いずれにしても、デフォルトの *H* を設定しないでリエゾンの *H* だけを設定するということが、必ずしも経済的であるとは言えないかも知れないが、この点については、さらに他のデータを収集して検討する必要がある。

6. まとめ

以上、バンバラ語の語の声調と、複合語の声調について概観し、名詞と数詞からなる名詞句や文中で変化する声調について、自律分節的な分析をみてきた。語の声調パターンは、大まかにみれば、多くの語が *H* 型か *LH* 型に入るように見えるが、少数の多様なパターンがあり、個別に記述されなければならない。一方、複合語の声調は全体が *H* 型か *LH* 型になる。*LH* 型の場合は前の語が *L*、後ろの語が *H* と規則的であり、複合語としての型が決まっている。このことから、これまで語の声調パターンについて、特に *H* 型と *LH* 型に分けられる、という点にばかり着目されてきたのも無理はないように思われる。

声調の変化については、先行研究を参考に、特に *LH* 型の語に見られる変化について、自律分節的な声調の付与の仕方をみてきた。語としては、基底に *H* も指定されていると考えるほうが妥当である。語に指定されている *L* は初頭の音節においてのみで、2音節以降は指定されておらず、*L* になるのは拡張によると考えられる。基底で声調が指定されていない補助詞 *be* (現在) やコンピュータの *je*

も、拡張によって L が付与されるか、そうでなければ H が付与される。

H の付与については、リエゾンの H を仮定し、それが付与されると考えるが、付与の条件は、収集例が少なく、厳密に詰めることができなかった。語の境界に浮遊すると考えられる H の存在は、一般的な自律分節の音韻論に照らし合わせてどこまで妥当であるのか、また、デフォルトの H との違いなどについて、さらにデータを収集して検証し、包括的な説明を今後の課題としたい。

略語

COP: コピュラ, NEG: 否定, PERF: 完了, PP: 現在分詞, PRES: 現在, QST: 疑問標識, SFP: 文末小辞, 1s: 1 人称単数代名詞, 3s: 3 人称単数代名詞

参考文献

- 小森淳子 (2014) 「バンバラ語の「形容詞」の特徴について」『スワヒリ & アフリカ研究』 25: 130-144.
- 小森淳子 (2017) 「バンバラ語のアクセントについて」『スワヒリ & アフリカ研究』 28: 91-108.
- Bird, Charles, John Hutchinson and Mamadou Kanté (1977) *An Ka Bamanankan Kalan: Introductory Bambara*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club. (録音資料 : <http://www.iu.edu/~celtie/Bambara-Intro.html>) [Retrieved on April 30, 2020]
- Courtenay, Karen (1974) “On the nature of the Bambara tone system” *Studies in African Linguistics*, 5-3: 303-323.
- Creissels, Denis and Claire Grégoire (1993) “La notion de ton marqué dans l’analyse d’une opposition tonale binaire: le cas du mandingue” *Journal of African Languages and Linguistics* 14-2: 107-154.
- Dumestre, Gérard (2003) *Grammaire Fondamentale du Bambara*. Paris: Karthala.
- Rialland, Annie and Mamadou Badjimié (1989) “Réanalyse des tons du bambara: des tons du nom à l’organisation générale du système” *Studies in African Linguistics*, 20-1: 1-28.
- Simons, Gary F. and Charles D. Fenning (eds.) (2017) *Ethnologue: Language of Africa and*

Europe. Twentieth edition. Dallas: SIL International.